

みらい
すくすく
通信

458号

この通信に掲載の野菜のお届け日

2020 年8月3 日～8月7 日

いつも有機野菜をお買い上げありがとうございます。
毎週、旬の情報をお伝えします。



新規就農物語① 安平、ハラハチファーム<前編> ～ポスト資本主義時代の遺伝子たち



中村欣(やすし)さんは2013年にハラハチファームをスタート。就農2年目までは有機農協へ年間20品目ほどの野菜を供給していましたが、今では中玉トマトと春先のハウスアスパラ程度。一体何があったのでしょうか。

中村さんは芽室町出身。高校、大学とバレーボールに明け暮れた、身長180cmを超えるアスリートです。明け暮れたと言ってもそれはプロを目指すほどで、社会人時代は国体にも出場した国体選手。曰く「バレーしかやってこなかった」ということで、就職も昼間練習ができるようにと夜勤型(19:00～4:00)の札幌の会社へ進みます。順調に結婚、そして子どもを授かった頃、奥様に病気があることがわかり、医者から「食を変えた方がいい」と言われました。「当時は安くてお腹を満たせばよく、食について何も考えていませんでした」それから生産地や添加物などを気にするようになり、同時に始めたのが家庭菜園。「美味しいし、楽しいし、感動しました」畑の大きさもどんどん大きくなり、気が付くと30品目は作っていたようです。

そして子どもの成長に伴い、新居を構えることに。その頃には、生活の中で家庭菜園の比重がかなり大きくなっていましたので、大きな畑のある家を探すのですが、予算内ではなかなか見つかりません。いよいよ札

幌を諦め、長沼に「ここなら!」という場所を見つけた時、たまたま近くで農業を営む方に話を聞く機会があり、大きな転機がやってきます。「その方は自然栽培で野菜を作り、宅配のみで生計を立てていました。自分も農業で苦しんだという方で、野菜への向き合い方、自然への向き合い方をいろいろと話してくれて、感銘を受けました」突如として自分の中に、「農家」という選択肢が芽生えました。

家を買うということイコール一生、会社員として生きるのか、それとも農家の道を選ぶのか。大きな選択が立ちはだかり、新規就農をあっ旋するイベントや相談会に相当数参加しました。夢を熱く語ってくれる人もいれば、現実の厳しさを教えてくれる人もいて、その度に「これは天職だ!」「いや僕なんかにはできるわけがない」と振り子のように行ったり来たり心変わりをしたそうです。それでも最後にイベントで小路さんと出会い、彼の自給自足的な暮らしに共鳴します。

2011年33歳の春、10年の会社員生活に別れを告げ、趣味レベルを超え野菜を作ってきた自信、スポーツで培った体力、そして将来への希望に溢れ、安平での研修生活をスタート。奥様のお腹には2人目の子どもが宿っていました。

研修は2年。1年目は無何有の郷農園の補佐、2年目はある程度場所を任せられ

就農研修の受け入れをする安平、無何有の郷(むかうのさと)農園、小路組合長のもとへ、2011年、2014年、2017年と立て続けに3人の青年がその門をたたき、各々がその2年後、安平で新規就農を果たしました。長引く不況、働き方、少子高齢、自然災害、そしてパンデミック。激変する時代のさ中、今までと違うことに挑む努力、人とは違う世界に踏み入れる勇気をもって、新たな道を歩み始めた新規就農者のストーリーを、それぞれの野菜へのこだわりと合わせてシリーズで紹介します。

◀ハラハチファームの現在の看板野菜。中玉トマト、シンディスイート、まもなく出荷!



▲2本仕立ての斜め誘引栽培。シンディスイートは幹が太いので1本仕立てよりも安定するといえます

好きな野菜を作りました。好きなことに打ち込め、さぞかし楽しかったかと聞くと、とんでもなくキツかったとの答え。「無何有の郷農園は根菜が中心で収量も多い。自信があった体力がまずアウト。僕の代のあとは収穫機なんかを購入されず自分と楽になったそうですが(笑)。それと会社勤めは一業種だったので営業的に指導いただくことも多々ありました」この研修では技術だけではなく、有機農家としての基本知識や経営、他の農家との付き合い方に至るまで、さまざまなことを学んだそうです。

そして2013年、無何有の郷農園の一部を借りて、めでたく就農の運びとなり、有機農協へ20品目ほどの出荷を果たします。「もう記憶がないくらい朝から晩まで働きました。これだけやればけっこう収入が上がっているはずだろう」2年目の収穫を終えた冬、中村さんは帳簿に残った金額を見て愕然としました。「これだけやって、たったこれだけ。お先、真っ暗…」。奥様のお腹には3人目の子どもが宿っていました。(つづく)